

4) ハルビン医科大学第三病院における直腸癌に対する外科治療について

趙 鵬・董 新 舒 (ハルビン医科大学)
張 寄 凡 (第三病院腹部外科)
須田 武保・畠山 勝義 (新潟大学)
第一外科

1975年から1993年まで、ハルビン医科大学第三病院で経験した直腸癌症例を対象として検討した結果、若年者直腸癌(30歳以下)の占める割合は15%であった。直腸癌が全大腸癌の71.4%を占め、かつ下部直腸癌(Rb, P)が高頻度(72.1%)であった。肉眼型で浸潤型(3型, 4型)が47.0%を占め、組織型は(por, muc, sig)33.5%と高率を占めていた。リンパ節転移の方では深達度でmpまでの群とss以上の群、肉眼型で限局型と浸潤型及び組織型で分化型と低分化型の間有意差が認められた。側方向転移は原発巣が腹膜返転部以下だけの症例で認められ、転移率は10%であった。3群までの郭清術を標準手術式として行っており、全体の5年生存率は68.0%で、10年生存率は47.1%であり、局所再発率は9.7%(122/1255)であった。

5) 当科における直腸癌側方リンパ節転移陽性例の検討

北原光太郎・宮下 薫
大橋 泰博・山口 和也 (燕労災病院)
浅海 信也・大黒 善彌 (外科)

【目的】直腸癌における側方郭清は根治性と機能温存を両立させなければならないという問題があり、施設によってその適応は微妙に異なっている。今回当科における直腸癌側方郭清の適応と現況を把握するために直腸癌側方リンパ節転移陽性例について検討した。【対象】1993年7月から1999年9月までに当科における直腸癌開腹手術症例104例中、側方郭清を行った49例を対象とした。49例中9例に側方転移が認められた。【結果】術式: APR 6例, SPO 3例, 局在: Rba 1例, Rb 4例, Rbp 3例, Rpb 1例, 深達度: 全例 ss (a1) 以深, 腫瘍径 3 cm 以上であった。また上方向リンパ節 n0 症例も2例認めた。術後局所再発は4例であった(49例中8例)。9症例の5年生存率は37.5%であった。

【考察と結語】当科では側方郭清の適応を基本的に全例両側自律神経温存で、RbではMP以深、腫瘍径3 cm以上、RaではSE以深、上方向N2以上の症例としている。今回の検討では検索し得た他施設と同様の

結果であったが、リンパ節関連の局所再発例も認めていることから、今後さらに根治性とQOLを両立すべく適応と郭清手技の検討が必要と考えられた。

6) 転移・再発大腸癌に対するトポテシン(CPT-11)の使用経験

川原聖佳子・瀧井 康公
藪崎 裕・牧野 春彦
土屋 嘉昭・梨本 篤
田中 乙雄・佐野 宗明 (県立がんセンター)
佐々木壽英 (新潟病院外科)

1999年4月～9月までに当科で経験した転移・再発大腸癌症例9例に対して、CPT-11 100 mg/m²を単独で週1回2週にわたり点滴静注し、その効果を検討した。9例中3例(33.3%)にPRを認め、再発部位別にはリンパ節転移で66.7%、肺転移で50%、局所再発で33.3%に効果を認めたが、肝転移と腹膜播種では効果は認められなかった。副作用としては白血球減少を55.6%、食欲不振、悪心・嘔吐を44.4%、下痢を22.2%に認めたがいずれも改善した。CPT-11は転移・再発大腸癌治療における重要な薬剤の1つであると考えられ、今後も症例を増やして検討する予定である。

II. 主 題

1) 十二指腸に初発し、7年後に大腸に病変を認めたリンパ腫の一例

馬場洋一郎・本間 照
小林 正明・佐藤 祐一
望月 剛・新井 太
米倉 研史・鈴木 恒治
鈴木 裕・杉村 一仁
成澤林太郎・青柳 豊 (新潟大学)
朝倉 均 (第三内科)
味岡 洋一 (同 第一病理)

症例は80歳女性。十二指腸球部後壁を中心に管腔約半周を占める腫脹した粘膜局面を認め、生検にて形質細胞腫(IgA陽性, λ陽性)と考えられた。病変が十二指腸に局在、高齢等の理由で経過観察したところ、病変は縮小傾向を示した。2年後生検組織は中細胞型びまん性リンパ腫の像に変化し、6年後には内視鏡的に病変を認識できなくなった。その1年後、大腸内視鏡検査でS状結腸・直腸に粘膜下腫瘍様隆起の散在を認め、MALTリンパ腫と診断された。大腸病変は4ヶ月後に消退し、9